

城壁をはさんだ攻防戦の段 ―『解放されたエルサレム』第十歌後半と第十一歌―

L'attacco e il contrattacco alle mura della città Santa

—La traduzione del Canto 10 (dalla strofa 50) e del Canto 11 della *Gerusalemme liberata*

水野留規

MIZUNO, Ruki

Solimano, nascosto nella nube incantata, appare improvvisamente davanti al re Aladmo e i suoi consiglieri, mentre Orcano lo offende. La sua ira viene in parte placata, quando il re, felice di vedere il suo grande amico, gli si volge con parole di saluto. Nel campo cristiano Goffredo interroga i cavalieri che avevano seguito Arnida nel Canto 4 e ora sono tornati al campo di battaglia nel Canto 9. Il Canto 10 si chiude con la profezia di Pier l'Eremita. Il racconto del Canto 11 si svolge su un tema religioso all'inizio, e dopo epico. L'esercito cristiano sale sul monte Oliveto per invocare la vittoria. Il poeta poi parla dell'assalto a Gerusalemme (dalla strofa 19): all'alba suona la tromba e i cristiani si preparano al cimento. Le macchine da guerra s'avanzano cercando di

gettare i suoi ponti mobili verso la mura della città. I tre guerrieri più arditi, Argante, Solimano e Clorinda, muovono contro l'attacco cristiano. La battaglia, molto fiera e sanguinosa, continua fino al tramonto con l'esito ancora incerto.

第十歌訳（第五十節以降）（一）

五十 「話にあがったわしは、いまここにおるぞ。逃げ腰の、怖気づいたスルタンではないぞ。臆病で、虚言を吐くこの男に、わしはこの剣をもつて挑もうぞ。わしは敵の血で大河のごとき流れを作り、平坦な戦場に死体の山を築いたというのに、敵陣の壘中に閉じ込められ、すべての部下を失ってしまうと、敗走者と刻印されるのか。五十一

この男「オルカーノ」が、あるいはこの男と同じ類の者が、おのれの祖国と信仰を蔑なげにして、卑屈で恥はすべき和平締結をなおも口にするならば、善良なる王よ、どうか承諾し給え、わしがその者をこの場で

殺すことを。われわれがどこかの地でフランク人と共に受け入れられて、いがみ合うことなく暮らすようになるのであれば、そんな事態が起きるより前に、子羊と狼は一つの檻に、鳩と蛇は一つの巢に入るでしよう。」**五十二** このように述べる間、ソリマーノは相手を威嚇しつつ、右手に握った剣を振り下ろさんとばかりに高く掲げている。その言葉に、その物凄い形相に、誰もが沈黙し、驚き入る。やがてソリマーノは怒りと脅しの表情を和らげ、恭しい態度で王の方へと進み、「期待し給え」と王に言う、「高貴なる方よ、わしの助力は絶大ですぞ、これからソリマーノはあなたに寄り添いましょう。」**五十三** アラディーノはすでに立ち上がってソリマーノのほうへ進んでいたが、答えて言う。「ああ、何と喜ばしいことか、ここでそなたに会えるとは、親愛なる友よ。余は自分の軍勢の一部を失ったが、もう失うことを心配する必要はない。もつと重大な損失を被ることを余は恐れていたのだ。そなたはわが王座を確固たるものとし、そなた自身の崩壊した王国もやがて立て直すことができるでしょう、天がそれを禁じなければ。」こう言うと、ソリマーノの首に手を回し、かれを抱擁する。**五十四** 王はニケリアの貴人を迎え入れると、自らが座っていた席を彼に譲る。そして自らはソリマーノの左に置かれた高貴な席に座し、自らの傍にはイズメーノを座らせる。王はイズメーノとの歓談の中で、かれとソリマーノが如何にしてこの場へ来たかを尋ね、イズメーノはその問いに詳しく答える。ソリマーノのものには、まず高貴なる娘が表敬のためにやってきて、他の者たちもそれに続く。**五十五** その中の一人であるオルムツセはソリマーノの部下であるアラブ人たちを率いていたのだが、戦いが激しさを増していたとき、人知れぬ脇道へと軍勢

を導き、静寂と闇にまぎれて彼らをエルサレムに無傷で連れ戻し、飢えていた人々に略奪した穀物や家畜をもたらした。**五十六** 凶暴なコーカサスの男だけはむっとした険しい顔をして、黙ってその場にはいない。しかしオルカーノは勇猛スルタンを見つめようとはせず、下を向いて思案に暮れている。パレスティナの専制君主、トルコノ王、戦士たちは、このような様子で会議の席についている。

五十七 だが敬虔なるゴツフレードは、敵を追撃して勝利を手中におさめ、進路を切り開いていたが、その間には倒れた自軍の兵士たちを弔う聖なる儀式も行っていた。そして今、生き残った兵士たちには二日後に行う攻撃に備えるよう指示し、城壁の中に籠った邪宗の徒たちに、大型で、破壊力のある戦闘装置を誇示して圧力をかける。**五十八** 異教徒と戦っていたゴツフレードは兵士たちの一団に助けられたのであったが、その兵士たちが自軍の主力を構成し、かの妖しい女の導きに付き従った者たちであることを悟り、またその妖女アルミーダの捕虜となり、かのじよの館に監禁されたタンクレーディがかれらと共にいるのを認めたので、そのかれらを自ら——「すなわち」隠者ピエートロと数名の武將たちのみを付き添われた自ら——のもとに招集する。**五十九** かれらに向かつてゴツフレードは言う、「諸君の中の誰かに語ってほしいのだ、しばし彷徨っていた諸君がその間に遭遇した危険な出来事の数々について、そして援軍があれば必要とされていた時に、あれほど価値のある援軍に諸君がなりえたのは如何なる事情の故だったのかということ。」かれらは恥じ入って頭を低

くしていたが、それは小さな過ちを心の中で痛烈に悔いているからであつた。ついにブリタニア王の賢き御曹司「グリエルモ」が声を上げ、目を天に向けて言った。六十 「私たちは壺の中から当り籤を引き当てなかつたものの、各人が誰にも知られないように、そして否定すると偽ることになります。愛神と欺瞞に満ちた美貌の女の邪悪な導きに従つて、秘かに出発しました。人通りが少なく、曲がりくねつた道を命じられるままに進む過程で、私たちは互いに反目し、心の底で嫉妬し合つていました。「アルミータの」軽やかな言葉や視線が、私たちの恋心と対抗心を（ああ、それを認識するのは遅すぎた）増大させていったのです^(三)。六十一 私たちがたどり着いた場所は、大昔に炎が膨らんだ塊となつて天から降り注ぎ、悪しき行為に耽溺した民が自然に対する罪のかどで罰せられた地でした^(四)。かつては肥沃な土地と豊かな農村がありましたが、今では生ぬるい水が淀み、生命の気配が感じられない沼沢地となっています。その脈流は曲がりくねりつづ周囲に伸びていますが、一帯には重苦しい空気が漂い、水面からは臭気も上がっています。六十二 この沼では重量のある物体が投げ込まれても、湖底にそれが達することはなく、軽い樅やトネリコの木のようになり、人間の体、そして重い鉄や石も浮くのです。沼の岸には館が建つていて、旅人を通すために、幅が狭く短い橋が架けられています。この館の中に私たちは入れられました。内部は——如何なる魔術の働きによるにせよ——豪華な造りで、そのすべての空間が優美なのです。六十三 この一角には優しい微風、澄み渡つた空、生気に満ちた木々や草花、清らかで優しい流れがあり、爽やかな銀梅花の林の中では泉が湧き、そこから小川が流れ出ています。枝葉が発する心地よい

眩きに誘われて、沈静な眠りが草原の懐にまで降りていくのです。鳥たちは歌い、素晴らしい装飾が施された大理石や金については贅言を要しないでしょう。六十四 清き溪流が近くで音をたて、ひときわ濃い木陰に包まれた草原の一角に、彫金細工で飾られた壺が置かれた豪華な食卓をアルミータは用意させ、そこには厳選された美味なる食物が盛り込まれていました。あらゆる季節の産物と、陸海の両方からもたらされる自然の恵みがそこにはあり、それらの食材は匠の手で調理され、きびきびと動く美しい多くの女給仕たちによつて運ばれていました。六十五 致命的な不幸の根源となる食物を、かのじよは甘い言葉と魅惑的な微笑を交えながら私たちに勧めました。さて、皆がまだ食卓につき、胸を焦がしつづ忘却にしばし陥つていた時、かのじよは立ち上がったと言いました、《すぐに戻ってきます》と。そしてやがて戻つてきたのですが、かのじよの表情はもはや穏やかで、愛想のよいものではありませんでした。片手で短い棒を振り、もう一方の手には本を持ち、低い声で読んだのです。六十六 魔女が読むのを聞くと、私は自分の思考や願望に変化が生じるのを感じ、暮らしや住処を変えたいと思うようになりました。（不思議な力が働いて）私は新奇な願いを抱くようになり、水の中に飛び入り、全身を水の中に浸し、潜りました。すると、どうしたことでしょう、両足が体の中に収められ、両方の腕も背中に入つていきました。私の丈は低くなり、体も縮み、皮膚が固いところで覆われていきました。人であつた私は魚になつたのです。六十七 同じように他の兵士たちもそれぞれ変身し、私とともに清冽な流れの中でびちびち跳ねていました。その時の私の状態は、漠として不可解な夢のごとくにしか、いま思い出すことができません。かの

じよはやがて私たちを本来の人間の姿に戻し、厳しい表情で次のように述べて私たちを脅しましたが、私たちは驚愕のあまり何も言えませんでした。六十八 《これで、私の力が分かったでしょう、私があなたたちを完全に支配しているということも。私の意思ひとつで、不幸な者は牢獄に終身繋がれて晴れやかな空を仰ぎ見ることができなくなり、他の者は鳥に姿を変え、別の者は木の幹となって土中の深いところに根を張り、あるいは硬い石となり、あるいは泉から湧き出る水となり、あるいは頭を荒い毛で覆われた獣となるのです》^(五)。六十九 もちろんあなたたちは私の命令に従うことで、私の激しい怒りを買わないようにすることもできます。改宗するのです、私たちの王国を守るべく、邪悪なブリオーネ^{ゴッフレッド}に対して刃を向けるのです。《私たちは皆が拒否し、侮辱的な取引に怒りを覚えました、ランバルドだけはそれを受け入れました》^(六)。私たちは（抵抗することもできず）縄で縛られ、光が射しこまない穴倉に投げ込まれました。七十 その後タンクレーディも館に連れてこられ、やはり牢に入れられました^(七)。しかし欺瞞で満ちた女魔術師は、私たちをいつまでも監禁してはいませんでした。（私の聞いたことが正しいとすると）ダマスカスを統治する方^(八)の使者がかのじよに掛け合つて、私たちを牢の外へ出したのです、弱り切つた私たちは鎖で繋がれたまま、多くの武装した護送兵たちに導かれて、エジプト王のもとへ捕虜として送られることになりました。七十一 こうして私たちが移動の途に会つたとき、天上の崇高なる意思の定めと計らいによつて、驚くべき偉業を成すたびにいつそう大きな名声を得た勇者リナルドが私たちの前に現れたのです^(九)。かれは私たちの護送兵たちを襲い、いつものごとく武勇を發揮しまし

た。護送兵たちを斬り殺し、勝利を確かなものにする、かれらが着装していた武具（それは以前には私たちの武具だったので）を私たちに付けさせました。七十二 リナルドの姿を私は見て、ここにいらる者たちも見ました。かれの剣が私たちを救つたのであり、かれは私たちに語りかけました。皆さんの間で流れている忌まわしい噂は真実ではないのです。かれは生きています。三日前にかれは私たちと別れ、一人の従者に付き添われてアンティオーキアへ向かいましたが、その際に壊れて血がついた武具を置いていきました。」

七十三 「グリエルモは」このように語つたが、隠者ピエートロはその間、双の眼を天に向け続けていた。その顔色も、表情も、いつものものとは異なつてゐる。ああ、いまやかれは何と神々しく、厳かな光に包まれていることか。神の恵みに浴し、放心状態になるほど昂揚し、自らの知を天使たちのそれに劣らぬものにしてゐる。未来を見通すことができるようになり、限りなく変転する年月や時代の中に探りを入れる。七十四 そして大きな声で堰を切つたように、未来に起るであろうことを周りにいた者たちに明かす。人々がかれの表情に見入り、尋常ならぬその声を一心に傾聴する。「生きてゐる、リナルドは」、と言つてかれは続ける。「ほかの情報人を騙そうとする女の虚言と策略だ。かれは生きてゐる、天は年齢にそぐわぬ誉を得ているこの若者を、より大きな栄光に導くべく護つてゐる。七十五 アジアでかれが知られ、噂される所以である事績は「より大きな偉業の」予告であり、手始めの武勳なのだ。ああ、私には見えるのだ、幾ばくかの年月が経過したとき、かれが邪悪な皇帝を追い詰めて、降伏せしめる

のが。そしてかれの抱く鷹が自らの銀の翼のもとで教会とローマとを擁護し、それらが獣〔皇帝〕の爪から解放されるのが〔十〕。かれの後継ぎとして相応しい者たちも生まれるだろう。七十六 後継ぎたちの息子たち、その息子たちから生まれる者が、輝かしく、歴史に残る勲功を成し、悪しき権力者たちや反逆者たちから司教冠と聖なる教会を守るであろう。自惚れる者を押さえ、弱きものを支え、無垢の者を守り、邪悪な者を罰するのが、かれらの信条となる。こうしてエステ家の鷹は、黄道より高いところを飛翔することになるだろう。七十七 全くもって正しいのだ、その鷹が真実の光を直視して、ピエートロ〔教皇〕を武力行使へと導くことは。キリストの名における戦いにおいて、鷹は不屈かつ必勝の翼をつねに広げて然りであり、それは鷹が生まれながらにして天から授かった高貴な本能であり、覆すことのできない宿命なのだ。ゆえに天は望み給うのだ、この尊き戦役に、そこから離れた者〔リナルド〕が呼び戻されることを。七十八 このとき賢きピエートロは自らが述べている事柄に畏敬を感じ、深く感じ入って沈黙した。そして心の中で——その動きは慈愛に富んだ顔に映し出されてきたのだが——エステ家の輝かしい栄光にかかわる数々の偉業について語り続け、それ以外のことには思いを巡らせようとしないようだった。やがて夜の帳がおおりて、黒い布が周囲の大気を包み、広い大地を覆った。兵士たちはその場から退き、身体を休めたが、ピエートロは高ぶった感情を鎮めることができなかった。

第十一歌

一 だがキリスト教軍の司令官は聖都に攻め入るためにあらゆる策

を練り、破壁車を攻撃に投入する準備に余念がなかった。その時、孤高の士ピエートロがそこへ現れ、ゴツフレードを傍らへ導くと、威厳のある厳しい口調で次のような言葉を述べた。「司令官よ、あなたは地上の軍勢を出撃させようとしておられるが、かようにして戦いを始めることはできませんぞ。」二 開戦は天の意思に適っていなければならぬのです。まずは全軍の真摯な祈りのうちに、天使たちと聖人たちから成る軍団に対して、われらに勝利がもたらされるよう懇願するのです。聖衣に身を包んだ聖職者たちに行列の先頭を進ませ、声を和して厳かに連禱を唱えさせるのです。全軍の兵士たちがあなた方、勇敢で栄えある武将であるあなた方から敬虔さを教え込まれ、われわれ聖職者たちの列に続くように計らうのです。」三 厳めしい隠者がこのように述べると、善良なるゴツフレードは隠者の賢明な助言を受け入れて言った。「イエスを信奉する僕として、私はあなたの提言に喜んで従おう。されば私は武将たちに対して私に付き添って進むよう命じるので、あなたは従軍している司祭のグリエルモとアダマーロを呼びに行き、莊重かつ神聖なる行進をかれらと共に取り仕切るがよい。」四 翌朝、老隠者は二人の司祭と他の下位聖職者ら呼び寄せるが、かれらが集まった場所は防御柵の中にある聖域で、ここでは普段から宗教儀礼が行われていた。下位聖職者らは白い祭服を身に着け、二人の司祭は金色に輝く外套——その二つの端は胸元に現れた白衣の上で留められている——をまとい、頭には冠を被った。五行列の先頭をピエートロは一人で進み、天国で崇められる十字の印をあしらった旗を風に靡かせる。その後を二列になった長い聖歌隊が重々しく、ゆっくりとした足取りで進む。かれらは声種によって二つに分

かれ、嘆願の歌を恭しい表情で歌い、聖歌隊の最後部をグリエルモとアデマール口の二君子が並んで進んだ。六 次にブリオーネ^{ゴッフレード}が来たが、司令官であるかれは慣例によって誰とも並んで進まなかった。かれの後ろには二人組になった武將たちが続き、さらにその後から武將たちを警護する武装兵士たちが整然と隊列を組んでやって来た。一団となった軍勢はこのようにして閉ざされた宿営地の外に出たが、ラツパを吹いたり雄叫びを上げたりすることはなく、敬虔な祈りの声だけを発していた。七 父なる汝に、父と同じくして息子なる汝に、両者から出て愛によって生じた汝に、人であり神である方〔キリスト〕の母にして乙女なる汝〔聖母〕に、軍勢は自らの願いを受け入れるよう懇願します。おお隊長〔大天使〕たちよ、あなた方は三つの階層に分かれた天の輝かしき軍団を動かしている。おお聖なる方〔聖ヨハネ〕よ、あなたは〔キリストの〕神々しき額に宿った無垢の人性を泉の水で洗い清めた。八 かれらと呼ぶ、神の館を造る石であり、揺るぎない頑丈な支えである汝〔聖ピエトロ〕を。いまや立派な人物が汝の新たな後継者となり、^{十二} 神の館で寛容と放免の扉を開いている。かれらは呼ぶ、天の王国に住まい、勝利の死を世に周知させた他の使徒たちを。おのれの血と命を捧げて真実を立証し、使徒たちに続いた殉教者たちを。九 かれらと呼ぶ、筆あるいは言葉によって天へと至る道の人々の記憶に甦らせた人々〔神父や説教者たち〕を。キリストの愛と信を得て、気高く生きることで徳を積んだ端女〔ベタニアのマリアア〕を。清らかな独房に籠って暮らし、荘厳な婚礼の儀によって神の花嫁となった尼たちを。王たちや民衆の迫害に毅然として立ち向かった他の修道女たちを。十 このような言葉を唱えながら、敬虔な人々

の列は幾つもの大きな弧を描きながら伸び、オリーブの木々に由来する名で呼ばれ、聖なる山として世に知られたオリヴェート山の方へと進む。この山は〔エルサレムの〕城壁の東に聳え、城壁と山は両者の間にある暗いジョサファの谷によって分断され、引き離されている。十一 この山に向かつて、唱和する人々は行進し、かれらの声は下方に落ち込んだ峡谷や小高い丘やその斜面の洞窟に伝わり、響きとなって方々に鳴り響く。その様はあたかも洞窟や木々の間に森の合唱隊が身を隠しているかのようで、キリストやマリアの大きい名が繰り返し、はつきりと聞き取れる。十二 城壁の上ではその間、イスラム教徒たちが驚きのあまり沈黙して、恭しく唱和しながらゆっくりと旋回しつつ進む人々——イスラム兵たちの眼にこの光景は異様なほど華麗で、奇妙な儀式のように映った——を見つめている。やがてこの聖なる行列の見物に見飽きると、信仰を抱かぬ哀れな連中は叫び声をあげ、罵りや侮辱の言葉が深い谷や山に轟いた。十三 しかしイエスを信じる人々が発する敬虔で軽やかな歌声は止むことなく、かれらは罵声に対しても反応しない。それを気に留めたとしても、喧しく鳴く鳥の群れを気に留めるとき以上の反応は示さない。異教徒たちが放つ矢も、かれらを怖れさせはしない。聖なる平和が非常に遠いところから放たれる矢によって乱されることはないの、かれらは聖なる句を最後まで途切れることなく唱え続けることができる。十四 山の頂に着くと、キリスト教徒たちは祭壇——それは聖職者が司る聖餐のテーブルである——をそこに設置し、その両側には鮮やかな金色に輝き、炎が灯された聖なる燭台が置かれる。祭壇を前にしたグリエルモはやはり金が施された華麗な祭礼の衣装を身に着け、まず黙って瞑想し、そ

れから回心の句と感謝の句を大きな声で朗々と唱え、祈る。十五 祭壇の近くにいる者たちは恭しく聞き、祭壇から最も離れたところにいる者たちは視線を祭壇から逸らさないでいる。だが、グリエルモは次に無罪にして十字架に架けられたキリストの神秘の祭儀を終えると、聴衆に向かつて「行きなさい」と述べ、戦士たちの頭に自らの手を当ててかれらに祝福を授けた。すると信仰心の篤い軍勢は先に通つてきた道を引き返していった。十六 兵士たちが防御柵のところに着き、隊列が解かれると、ゴツフレードは自らの天幕の方へ向かい、大勢の兵士たちが一団となつてかれの後を追う。天幕の近くまで来ると、敬虔なるブリオーネは後ろを振り返り、兵士たちに立ち去るように命じるが、武將たちには留まらせて自らと共に食卓につかせ、自らの正面にトロローザの老伯爵(「ライモンド」)を座らせる。十七 湧き上がる食欲と抑えがたい喉の渇きを皆が満たすと、武將たちに向かつて全軍の司令官は言った。「新しい陽が昇るとき、諸君たちは皆、総攻撃の準備ができてるように。明日は厳しい戦いの日となるだろう。今日はそのための準備と休息の日とする。されば諸君はそれぞれの天幕へ戻り、諸君も、そして諸君の兵士たちも準備に取り掛かるのだ。」十八 武將たちがゴツフレードのもとから離れ、続いて伝達役の兵士たちがラツパを吹いて、新たな陽光とともに武装して待機しなければならぬことを各兵士に伝えた。こうしてこの日はその一部の時間が休養に充てられたが、安眠の友である夜の静寂が労苦と再び折り合いをつけるまで、「兵士たちの中には」戦いの準備をしたり、戦術を練つたりする者がいた。

十九 まだ暁光が薄く、東の空が朝を生み落していなかったとき、大地は硬い犁によつて耕されず、牧人たちの家畜は田畑に戻されず、木々の間では鳥たちが舞い、森では獵犬の咆哮も狩人たちの角笛の音も聞かれなかったのだが、そのとき朝を告げるラツパが鳴り渡り、「武器を取れ」、「武器を取れ」の指令が空にとよむ。二十 「武器を取れ、武器を取れ」の雄叫びがすぐに多くの兵士たちから方々で立ち起る。強者(つわもの)ゴツフレードは起き上がり、いつもの豪華な甲冑と脛当てではなく、別の武具に身を包む。その武具を付けると機敏に動くことができ、歩兵のように見えるのだが、そんな軽量の鎧をすでに着込んだかれのもとに善良なるライモンドがやつて来た。二十一 この男は司令官の武装の様を見てその意図を推し量り、言った。「重々しく、頑丈な鎧はどうしたのですか。司令官よ、あなたの他の鉄の装束はどこにあるのですか。なぜ武具で体を完全に覆わないのですか。そんな軽装備で出陣されてはいけません。そのようなあなたの出で立ちを見ると私は邪推いたします、兵卒に与えられる価値の低い榮譽を求めておられるのではないかと。二十二 何を求めておられるのですか。城壁をよじ登る者に与えられる個人的な榮譽ですか。城壁を命がけて攻めるのは、あなたよりも階級が低く、戦における役割も小さい者です(危険はその者が冒すべきなのです)。司令官よ、どうか普段の武具をお付けください。そしてわが軍の為になるよう、あなたご自身のお体を大切にしてください。あなたの魂は軍の指揮という使命を帯びており、神によつて手厚く守られているのです。」二十三 こう言うとライモンドは黙り、ゴツフレードが答えた。「今こそ、そなたに言つておこう。クレルモンで偉大なる教皇ウルバーヌス(十二)がこの剣を私に与

え、その全能の手が私を聖なる騎士としたとき、私は心の中で神に誓ったのです、私は戦地で司令官としての役割を担うのみならず、必要な事態が生じた時には、一人の戦士として武器を取り、全力で戦おうと。

二十四 されば、わが軍勢が敵軍に対して戦闘を開始し、攻撃を仕掛け、私が軍の指揮官としての任務をすべて果たした暁には、私も城壁を攻略するべく戦つてよいと私は思うのであり（それはそなたも容認してくれると私は信じる）、また天に誓つたことを私は守らねばならない。天は私を守り、助けてくださるであろう。」二十五 このように述べ、フランス人の騎士たちやプリオーネの二人の弟たち（バルドヴィーノとエウスターツィオ）はゴッフフレードが示した範に倣つた。ほかの武将たちも平生より軽い武器で体の一部を覆い、歩兵と変わらぬ姿で現れた。

異教徒たちはその間、七つの冷たい「熊座の」星々の方を向いた城壁（すなわち北側の城壁）が西へと曲がつている地点で、その上部「胸壁」に登っていたが、そこは外から到達しやすすい地形のゆえに侵入を招きやすい場所であった。二十六 町が他の方角から攻め込まれ、危害を受けるとは思われない。ゆえに邪悪な暴君は自らの軍勢と傭兵たちをそこへ集結させ、子供や老人までを——重大な事態に際して苛酷な労役に駆り出すべく——そこに集め、石灰や硫黄、瀝青、石、矢などを屈強な戦士たちのもとへ運ばせる。二十七 平地を見下ろして聳える「北側の」城壁に沿って、その胸壁の前面に異教徒たちは戦いの機材や武器を配備した。こちら側では凶暴な巨人のごときソリマーンが腰から上を乗り出し、あちらの凸壁の間では睨みを利かせたアルガ

ンテが塔のごとく立ち、その姿は遠くからでも見てとることができる。ひとときわ高いアンゴラーレの櫓の上に陣取つて、他のすべての者を眼下に置いているのは卓越した女戦士クロリンダだ。二十八 クロリンダが背に担いだ籠は、先の尖つた矢の重みで垂れ下がっている。かのじよはいまや弓を握り、矢をすでに弓の弦にあて、その弦を張っている。美しき射手は標的となる敵を待ち伏せて、射とめようとしているのだ。空の雲間から矢を放つとかつて信じられたデロス島の乙女（ディアーナ）さながらの姿である。二十九 白髪（アラデューン）の王は門と門をつなぐ下の通路を徒歩で行ったり来たりし、城壁の上にいる兵士たちが先に出したおのれの指示に従つて動いているか注意深く確認し、かれらを勞い、励ます。こちらで兵士を増やせば、あちらでは武器を運ばせ、すべてに気を配る。だが、母である女たちは嘆き声をあげ、邪悪で偽りの神に練り返し折るべくモスクへと入つていく。三十 「おおわが主よ、どうかあなたの正しく強い手によつて、かのフランク人の盜賊の槍を打ちくじき、あなたの大いなる名をけがした男（ゴッフフレード）を倒して、城門の下に葬り給え。」女たちはこう言つたが、その声は地下にあつて号泣に包まれた地獄にまでは届かなかつた。

さて、町の中で防戦の準備が進められ、祈祷が行われている間に、敬虔なるプリオーネの軍勢は武器を携えて整列する。三十一 ゴッフフレードは入念に練られた作戦のもとで歩兵たちに先頭を進ませ、城壁に対して両側から斜めに攻め込もうとする。二つの歩兵団の間には弩砲やその他の戦闘機材を城壁と向かい合うように配備し、それらの装置から狭間（さきま）をめぐけて石や槍を稲妻のごとく放つという作戦なのだ。

三十二 歩兵団の後方にはかれらの護衛にあたる騎士たちが、その周囲に伝令役の騎馬兵がそれぞれ配備される。ゴツフレードが次いで攻撃の命令を出すと、弓や投石機を持った多くの兵士が、そして弩砲から放たれた矢や石が、城壁上部にいるイスラム兵たちの数を減らしていく。それらを受けて死ぬ者もいれば、持ち場から離れる者もいて、いまや城壁を守る兵士たちはまばらである。三十三 それを見てフランク人の軍勢は勢いよく走り出て、少しでも早く城壁に近づこうとする。一部の兵士たちは盾と盾とを重ね合わせて、それらを天井にして自らの頭部を守る。別の者たちは降り注ぐ石から身を守るために護身の防具の下に体を伏せる。そして「城壁を囲む」壕のところへ着くと、深く落ち込んだその窪みを埋めることで、壕と「手前の」野の間にある段差を無くそうとする。三十四 壕には泥土も泥水も「乾いた土地の特性ゆえに」溜まっていなかったため、兵士たちは幅広く、深い窪地に石や枝木や灌木や土塊を入れる。その間に勇猛なアルカストロが飛び出して、誰よりも先に梯子を城壁に立てかける。あられのごとく降り注ぐ矢、熱い瀝青、それらに怯むことなく、かれは梯子を登りだす。三十五 勇ましきヘルヴェティア人「アルカストロ」が空中の行路「梯子」の中ほどのところで、無数の矢の標的となつているのを人々は見た。かれは傷つくことなく、梯子を猛然と登り続ける。その時、由々しき重さの丸岩が——射石砲から放たれたと思われるほどの速さで——飛来して、それを兜に受けたかれは地面に落下する。投げたのは、かのコーカサスの男である。三十六 アルガストロは一命こそ取り留めたが、受けた打撃は激しく、落下して気を失い、横たわったかれの体は動かない。するとアルガンテが勇ましく、力強い声で叫ぶ、「最

初の者は倒してやった。さあ、次に来る者は誰だ？身を隠している兵士どもよ、なぜ出てきて、面を上げて戦おうとしないのか？俺は隠れてなんかいないだろう。変てこな壕に隠れるなんて身の為にならんぞ。巢の中で死ぬ獣みたいになるぜ。」三十七 このようにアルガンテは言ったが、姿を隠した兵士たちは前進を続け、護身具や重ねあわされた分厚い盾の傘の下で矢や巨石に耐える。大木を配した巨大な破城槌を城壁に近づけるが、この角材（の先端）は雄羊の頭の形をした硬い鉄であり、城門や聳え立つ城壁にとつては脅威である。三十八 巨大な岩塊がそのとき城壁の上に運ばれてくるが、それを転ばすのは町を危機から救おうとする多数の人間の手だ。岩は最も多くの兵士たちが下で身を潜めている盾の傘の上に投げ落とされ、そこは山が投げ込まれたような光景を呈する。盾の重なりは破壊され、兵士たちの兜や頭が打ち碎かれる。地面には武器や骨が散乱し、赤い血や脳みそがこびり付く。三十九 町を攻めるキリスト教軍はこうした状況の中で、もはや護身具の下には戻らない。「身を潜めることで生じる」盲目の危険を避けるために外へ躍り出て、姿を現して堂々と戦うことにしたのだ。かれらの中には梯子を城壁に架けてよじ登ろうとする者がいれば、城壁の下部を「破城槌で」競って崩そうとする者たちもいる。そのため城壁は揺り動かされ、フランク人たちの攻撃を受けて破損した部分から側面が見えている。四十 恐るべき雄羊「破城槌」の度重なる強烈な打撃によって、城壁は倒壊しても不思議ではなかったが、城壁上部にいるイスラム兵たちの戦いの術や知恵——それらはかれらが経験によって会得したものであった——によって持ちこたえる。「破城槌の」巨大な角材が城壁の如何なる部分に近づいても、かれらは羊毛の

束を吊りおろし、角材と城壁の間の隙間にそれを挟み込んで、柔らかく屈しやすい素材が角材による打撃を吸収し、その衝撃を抑えようとする。

四十一 両軍の戦士たちが城壁をめぐるべくも激しい攻防戦を展開していた時、クロリンダは七回弓を張り、弛め、矢を発した。下方に向かつて射られた矢は、矢じりの鉄から矢はずの羽毛までが血で染まった。その血は凡俗な兵士のものではなく、気高い武人から流れ出たものである。この誇り高き女戦士が狙うのは低級な敵ではないのだ。

四十二 かのじよが最初に傷を負わせた相手は、イギリス王の若き後継者「グリエルモ」であった。護身具から頭を外に出した時に、致命的な矢を受けたのだが、鋼の手袋を付けていたにもかかわらず、かれの右手は矢に射抜かれた。戦う能力を失ってかれは身震いしながら戦列を離れたが、その震えは傷の痛みではなく、悔しさに起因するものである。**四十三** 「クロリンダは」濠の土手のところにいたアンボワーズの善き伯爵と、梯子を登っていた「フランク人」ことクロタレオも倒した。最初の者は胸から背中までを貫通する矢を受けて、後の者は一方の脇腹から反対側の脇腹までを矢で串刺しにされた。フランドーアの領主であった男「ロベルト」は破城槌を押ししていたときに左手を射抜かれ、もはや押すことができなくなり、刺さった矢を抜こうとするが、先端の鉄は肉の間に食い込んでいる。**四十四** 激しい戦闘を遠くからとはいえども、無防備の状態で眺めていた司祭のアデマールは、飛び来たった必殺の矢を額に受け、右手を傷口に当てようとするが、その刹那に別の矢が延ばした右手に命中し、顔にまで達する。かれは

倒れ、女戦士が放った二本の矢を「聖職者の体から流れ出た」聖なる大量の血が洗い清める。**四十五** 一切の危険を顧みずにパラメーデは、梯子にかけた足を一段一段上へと進め、狭間がある城壁上部に迫っていく。そのかれの右目に「クロリンダが放った」七番目の矢が降り下り、先端の鉄部は眼窩と目の腱を貫き、首筋から真つ赤になって飛び出る。かれは梯子から崩れ落ち、攻防戦が展開される城塞の下で息絶える。

四十六 かのじよがかくも果敢に矢を放っている間、ゴツフレードは城壁を守備するイスラム兵たちに対して新たな攻撃を仕掛ける。破壁車の中でも最大の車両が城門の傍にすでに横づけされている。この破壁車は木を組んで造られていて、城壁の最上部に達するほどの高さがある。兵士たちを乗せ、武器も積み込まれていたが、車輪を備えているので動き、牽引されている。**四十七** 動き回るこの物体は槍や矢を放ちながら進み、できるだけ城壁に近づこうとする。海戦の最中に艦上の兵士が敵の船舶に向けて掛け鉤を投げるように、破壁車から城壁の中に飛び移るための板が掛けられようとするが、それを阻止しようとする城壁の防備隊は破壁車の前部分や両側面を攻撃する。槍を使って破壁車を押し返し、「破壁車の」狭間部分や車輪にも石を投げつける。**四十八** 幾多もの石や矢がこちら側からもあちら側からも放たれ、空が暗くなるほどであった。矢を包み込んだ二つの雲が空中でぶつかり合い、矢がそれを発した者のところへ戻るということも起こった。木々の枝が冷たい氷となった雨に打たれて葉を落とし、果実も熟さないうちに枝から落ちるように、サラセン人兵士たちも城壁か

ら落下する。四十九 サラセン人たちは「キリスト教徒軍兵士ほど」身体を武器で保護していないので、それだけ大きな衝撃を体を受ける。生き残った者の中にも、巨大な物体の攻撃に恐れをなして逃げる者がいる。だが、ニケーアの専制君主であった男「ソリマーノ」はそこから離れず、士気を失っていない少数の者を引き止める。豪勇アルガンテは丸太を手にして、塔のごとき敵の破壁車に対抗する。五十 そして破壁車を樞の丸太で突いて、自らの腕力が及ぶ限り丸太を支え、丸太の長さ分だけ破壁車を自分から引き離す。かの気高き乙女もその場へ「アンゴラーレの櫓から」降りてきて、危機に陥った仲間たちと命運を共にしようとする。フランク人たちはその間、「城壁の上から吊り下げられている」羊毛の束に付いた縄と組み紐を長い鎌で切断し、城壁はそのため無防備の状態になった。

五十一 かくして城壁は、上部においては塔「破壁車」に、下の部分では荒れ狂う粗野な雄羊「破城槌」に攻撃され、すでに穴が開くほど破壊され、通常は見えない内部の街路が姿を晒し始める。司令官は倒壊寸前の城壁の傍まで近づいて、普段あまり使うことがない大きな盾の背後にうづくまる。五十二 そしてその地点から「城壁の内側を」何度も注意深く窺う。すると見えるのだ、ソリマーノが城壁の下へと降りてきて、瓦礫の間に口を開けた危険な裂け目を監視しているのが、またクロリンダとコーカサスの騎士が敵の侵入に備えて城壁上部にいるのが。こうした状況を目の当たりにして、かれは「聖戦の勝利を確信して」心が尊き感動を伴って燃え上がるのを感じた。五十三 それから「自らが持っているものとは」別の盾と弓を携えていた善き

シジエーロのほうを向き、言った。「おお、私が信頼を寄せる盾持ちよ、そなたが手にしている盾は「私の盾よりも」軽く、小さいが、それを私に与えよ。私は危険を覚悟の上で、崩れ落ちた石の山の上方にできた突破口から、誰よりも先に町の中に入りたいのだ。今こそはわれらの武勇を証明する、尊き行動を起こす時なのだ。五十四 こう言って、直ちに盾を取り換えたその時、風を切って一本の矢が、ゴッフレードに向かつて飛来して、その脚に突き刺さって、大きな痛みを生み出す神経が密に走る部分を貫通する。噂によると、矢を放ったのは、クロリンダよ、あなたであり、この勲功に対する称賛はあなたにだけ与えられるのだ。あなたが擁護する異教徒たちが死と隷属状態をこの日に回避することができたとしたら、それはあなたの功績に帰するのだ。五十五 だが、きわめて強靱な英雄は、激しい痛みを感じないかのごとく、それまでと同じように動き、決意した突入を試みる。瓦礫の上に登り、他の兵士たちに続くよう命じる。しかし次の瞬間、もはや立っていられず、脚が使い物にならないほど損傷していることを悟る。脚を動かすと痛みが増すので、ついには突入を断念せざるを得なくなる。五十六 手招きをして、雄々しきグエルフォを自らのもとへ呼んで言う。「私はこの場から離れなくてはならない。そなたが司令官の役を代行し、私がいなくとも万事に支障が生じないように計らってください。だが、私は長く離れない、まもなく戻ってくる。」そう言って出発したのだが、かれが駿馬に跨り、防御柵のところへ着く様子を、皆が見ていないはずがなかった。五十七 司令官が戦列から離れたことで、フランク人たちは運から見放され、劣勢を強いられる。対するイスラム教軍は士気を高め、望みを見出し、活力を取り戻す。キリスト教軍

兵士たちの心の中には、軍神の援助に対する期待のみならず、闘志や激情までもがいまや見られない。かれらの太刀は斬られた相手が出血しないほど緩やかに振り下ろされ、かれらのラツパも弱々しい音しか発しない。五十八 怖れをなして一旦は逃げたサラセン人の軍勢が、城壁の狭間にたちまち姿を現す。町の女たちは勇猛な女戦士（クロリ ندا）の姿を見て、本当の祖国愛に駆られて自らも武器を取る。女たちが走るのを見よ、髪を振り乱し、スカートをまくり上げて、町を守ろうとしている。かのじよたちは槍を投げ、大切な城壁を守るためなら胸を射抜かれることも恐れない。五十九 「キリスト教軍の」指揮を取るグエルフォが傷ついて倒れ、フランク人たちは茫然とするが、町を守る人々は危機感を和らげる。かれに取りついた運命は多くの兵士たちの中にかれを見出し、石の弾道を遠くから操作した。それと時を前後してライモンドも、同じような打撃を受けて、同じように倒れる。六十 そして勇敢なエウスターツイオもその時、流れ矢を濠の傍らで受けて、深手を負う。フランク人たちが窮地に追い込まれたこの間、かれらに向かつてイスラム軍が放った矢（その数は多かったのだが）の中で、「キリスト教軍兵士の」命を奪わなかった矢、あるいは傷を少なくとも負わせなかった矢はなかった。かくしてイスラム軍が優勢に戦いを展開する中で、^{アルカサの男は}相手をいつそう刺激するかのよう大きな声で叫ぶ。六十一 「ここはアンテオオーキアではないぞ^{十三}。いまはキリスト教徒どもの欺きに手を貸す夜ではないぞ。見よ、輝く太陽を。人々は寝てないぞ。「アンテオオーキア戦のときとは」異なつた戦略を立てて、異なつた戦い方をしたらどうだ。さては戦利品や栄誉を得ようという気持ちもなくなつたのか。早々に

戦いをやめ、ちよつと襲撃しただけで疲れてしまつて、おおフランク人の男たちよ、いや、女たちよ。」六十二 こう言い、こう言うことで、大胆な戦士は自らの闘争心を募らせる。自らが守るこの大きな都市でさえも、自らの武勇を発揮する場としては小さく思われ、「城壁上部から」下の壁に穴があいているところに飛び降りる。その裂け目は突破口になっていたが、その隙間に巨体を押し込め、自分の横にいるソリマーノに向かつて叫ぶ。

六十三 「ソリマーノよ、この地こそ、この時こそ、われわれの武勇を試すもの。なぜ貴様はあとへ退くのか。何を怖れるのか。この外に広がる野で最高の称賛を得ようとする者は、得るべく努めればいいのだ。」こうアルガンテが言うのと、両者は猛然と、競つて野へと降りて行つた。一方の者は激情に、もう一方の者は栄誉欲に駆られていたが、後者の男は挑発的な招きによっていきりたつていた。六十四 両者は敵に襲いかかつて、互いに武勲を競い合つたが、両者に予期せずして突然襲われたキリスト教軍兵士たちの中には命を落とした者が少なくなかつた。盾や兜が破壊されて散乱し、梯子はへし折られ、破城槌は潰されてばらばらになつた。それらが積み重なつて山のようになり、もともとあつた瓦礫と合わさつて、傷ついた城壁に代わる新たな壁が盛り上がった。六十五 キリスト教軍の兵士たちは先ほどまで梯子を昇り、最高の誉れである城壁冠を得ることに懸命であつたが、いまや町の中に侵入する望みを捨てたばかりか、身を守ることすらできなくなつたようなのだ。逆を受けた襲撃に屈し、荒れ狂う二人の敵にやりたい放題をさせ、城壁の破壊装置も放棄し、それらは襲撃を受

けた際に破壊されたので、もはや合戦における使用に耐えないだろう。
 六十六 二人の異教徒戦士は両者とも、自らの激情にまかせて、キリスト教徒にいつそう追い打ちをかける。市民たちに松明を用意させ、燃える松の枝を持つて塔「破壁車」のほうへ進む。さながら冥界神フレイトの命令によつて動く邪悪な姉妹たちのようであるが、かのじよらは冥界の扉から出てきて、蛇の髪を掻き乱し松明を振りながら、世界を混乱に陥れるという。六十七 不屈のタンクレーディは戦場の他の場所において、自らのイタリア人部隊を町に突入させようとしていたが、「二人の異教徒戦士の」物凄い奮闘ふりと二つの大きな松明の炎を見て、下した命令をいったん撤回し、サラセン人戦士たち「アルガンテとソリマーノ」の猛攻を食い止めるべく直ちに行動を起こす。そして逃げるキリスト教軍兵士たちに対して勝ち誇っていた二人をいまや敗走に転じさせ、その恐るべき戦果で自らの武勇を証明する。

六十八 このように運命の変転に呼応して戦況はいまや推移したのだが、その間に負傷した司令官は自らの大天幕にすでに搬送され、側には善きシジエーロやバルドヴィーノ、周囲には不安に駆られた大勢の部下たちがいる。心がはやるゴッフレードは自分の手で傷口から矢を抜こうと試みるが、矢柄を折ってしまう。六十九 かれは最も簡素で、早く終わる治療をするよう求め、傷の最も深い部分を自ら開いて、広い範囲を切開する。「私を戦場に戻してくれ。私が戦いに復帰するより前に、日没とともに戦いが終わってはならぬ。」そう言つて、長いオークの槍を杖にして、手術の刃を受けるべく脚を置く。七十 治療に当たるのは、ポー河の流域で生まれた老齢のエロティモであり、

草や水のあらゆる治療効果をよく知っていた。詩作にも勤シんでいたが、言葉を伴わない技に従事して、小さな栄誉を得ることに満足していた。病んだ体が死に至らないように医療にひたすら取り組んだが、その文才によつて人々の名前を永遠に留めることもできる人物であった。七十一 司令官は槍にもたれかかり、痛みで震えつつも、毅然とした表情をくずさず、涙一つ見せない。エロティモは丈の短い服を着て、両袖をまくり上げ、軽やかに動きながらも慎重に、薬草の力を借りたり、外科医としての技を駆使したりして、矢先を摘出しようとするが、功を奏しない。右手で矢を握り、ペンチでつまみ出すことにも失敗する。七十二 運命はエロティモの治療に協力せず、その試みにもまったく微笑むことがないかのようだ。エロティモは傷ついた英雄を極度に苦しめ、もう少しで殺してしまうほどなのである。そういう事態になった時、ゴッフレードの不当な苦しみを憐れむ守護天使が、イータ山でハクセンを摘んだ十四。赤紫の花をつけ、柔い毛に包まれたこの植物は、若葉に大きな薬効がある。七十三 自然は優れた教師であり、流れ矢を受けて横腹に矢が刺さった雌山羊たちに、この薬草が隠し持つ力を教える。ハクセンは「エルサレムから」相当に離れた地に植生しているが、天使は一瞬のうちにそこへ行き、洗浄のために用意された水の中に、その液汁を誰にも気づかれないように入れ、七十四 リディア十五の泉に湧く聖なる水には芳しい万能薬を混ぜる。老医師が傷に液体を振りかけると、矢は傷口から自ずと出て、出血が止まる。脚の痛みが消え、活力が戻ってくる。エロティモが叫ぶ、「あなたの傷が治癒したのは、医療に拠るものでも、人である私の腕前に拠るものでもありません。七十五 もっと大きな力が働いて、あ

あなたは救われたのです。私が思うに、あなたを救おうとした天使が地上に降臨したのです。天上の手の痕跡を私は認めます。武器を取ってください。遅れてはなりません。戦場へ戻るのです。」戦地に戻ろうとする敬虔なるゴツフレードは両脚に巻いた紫の布を締め、長い槍を揺らし、置いてあつた盾を腕に抱え、兜の緒を締める。

七十六 陣地を囲む防御柵から外へ出て、大勢の兵士たちを引き連れて戦場となっている町へと向かう。空は砂埃によつて覆われ、大地は進軍する兵士たちの下で揺れた。遠くの方からかれらが近づいてくるのをイスラムの兵士たちは城壁の上から見て、骨の髄に冷たい慄えが走り、血液が凍てつくのを感じた。ゴツフレードは空に向かって三度（兵士たちを鼓舞するため）叫び声をあげた。七十七 かれの軍勢は、聞き覚えのある力強い声、戦いへと導く雄叫びを耳にして士気を俄然高め、戦いを再開するべく勇んで行動を起こす。しかしイスラム側の二人の荒武者たちは城壁の裂け目のところに引き下がり、勇敢なタンクレーデイとその軍勢がそこから町の中へ入るのを何としても阻止しようとする。七十八 その場所に闘志を露わにしたフランスの指揮官が武器に身を固めて到着し、城壁に近づきやいなや、稲妻のごとき勢いで槍をアルガンテに向かつて投げる。いかなる破壁装置も、これほどの力を込めて槍を投じることはないだろう。音を立てて飛来する節くれた長棒に、アルガンテは何ら怖れることなく盾でもつて対抗する。七十九 先端が尖ったトネリコ材の槍に盾は突き破られ、強固な武器も衝撃に耐えられない。槍はすべての武器を破壊し、ついにはサラセン人戦士の血までも吸いこむ。だが、コーカサスの男は（痛

みなど感じることなく）鎧と体に食い込んだ盾を引き抜くと、それをゴツフレードに向かつて投げ返す。「貴様に槍は返してやるぞ。貴様の武器は貴様に戻してやるぞ。」八十 槍は往路と同じ軌道を帰路も飛び、往路の槍が攻撃の役目を帯びていたのに対し、報復のために投げられた帰路の槍は、狙った相手を傷つけない。ゴツフレードが体がかがめたので、かれの頭には命中せず、忠実な部下であるシジエーロがそれを受け、槍の鉄部で喉を深く切る。敬愛する司令官の代わりになつてかれは死を迎えるが、安らかな表情で明るく現世を後にする。八十一 ほとんど同じ時、ソリマーノが投げた石がノルマン人の騎士「ロベルト」に命中し、この男は七転八倒した挙句に、駒のように回りながら下方へ落ちる。自軍の被害が甚大と感じ、もはや我慢ならぬゴツフレードは剣を握りしめると、高く盛り上がった瓦礫の山に登り、敵と取っ組み合いの戦いを始める。八十二 かれがそこで演じた戦闘は驚嘆に値するものであつただろう。そして激しく、凄惨な戦いがその後にも続いただろう。だが夜の帳が下り、その翼が不気味な霧で世界を包み込んで、哀れな人間たちの激情の合間に平和な闇を挟み込んだ。そのためゴツフレードは戦いをやめて自らの幕営へ戻り、血なまぐさい一日が終わつた。

八十三 しかし敬虔なるブリオーネは退却する前に、傷を負つて弱つた兵士たちを自軍の陣地へと搬送させ、戦闘で用いる装置についても敵から略奪されないように撤収させる。敵軍にとつては大きな脅威となつていた巨大な塔（破壁車）も、激しい攻撃を受けて部分的には損傷していたが、無事に陣地に運び込まれる。八十四 塔は危険に

晒されていた戦場から安全な場所にいまや安置されようとしている。だが荒れた海を帆にいつぱい風を受け、波と戦いつつ進む舟が港に近づいたときに座礁したり、隠れた岩に側面を擦ったりすることがたまにあるように、あるいは危険な道を駆けてきた馬が慣れ親しんだ厩うまやに近づいたときに躓つまずいて倒れるように、八十五 塔も突然進まなくなり、投石を受けて破損していた側の二つの車輪が砕かれて、傾いた危険な状態で静止する。だが牽引や誘導にあたっていた兵士たちが塔の支えとなる丸太を地上に立て、破損箇所の修理をする工作兵たちが集まるまでの間、塔が倒れないようにする。八十六 ゴツフレードは新たな陽が昇るまでに作業を終えるよう命じ、周囲の道という道の警備を強化するとともに、塔の周りに見張りの兵士を配置する。だが工作員たちが作業する音や交わす言葉などは町の中にいる者にもはつきりと聞こえ、多くの松明が作業場を照らしていたので、「キリスト教軍の様子は」イスラム側にすべて察知され、その作戦までが見抜かれていた。



図3 弩砲 (第11歌、31-32に係る)、*Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary, on bilingual principles*, 1960, p.269

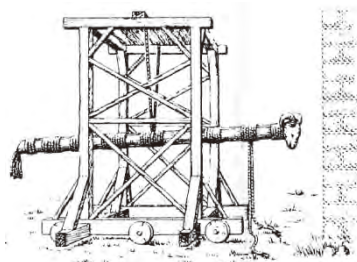


図4 破壁槌 (第11歌37などに係る)、『研究社 新英和大辞典』、東京、1980、p.178

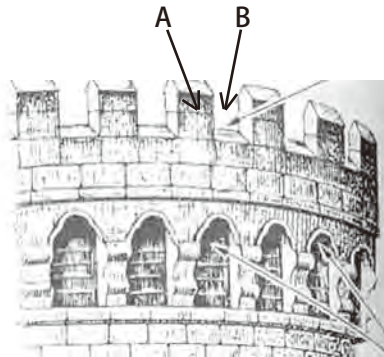


図1 城壁上部 (胸壁)。Aは凸壁、Bは狭間。『研究社 新英和大辞典』、東京、1980、p.142



図2 十字架の旗を持つビエトロを戦闘に、勝利を祈願して聖山に向かって更新する聖職者とキリスト教軍兵士たち (第11歌5-6に係る挿絵、1760年版。)

参考図



図6 手前右で手当てを受けているのはゴッフレード、背後にはエルサレムの街が描かれ、城壁をはさんで両軍が攻防戦を繰り広げている（第11歌に係る挿絵の一部分、1760年版）



図5 城壁冠（第11歌65に係る）
古代ローマ参考図において敵の城壁に一番乗りして、自軍の軍機を立てた者に与えられた。
Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary, on bilingual principles, 1960, p.1178

註

- (一) 訳文中の「」は筆者による補足説明。「」は原文に付いているもの。原作のトルクワート・タツソ著『解放されたエルサレム』は一五八一年初刊、全二十歌。本稿で掲載する訳は紀要四十六号で紹介した訳の続きで、原作の第十歌後半と第十一歌を含む。第十歌後半にはイスラム側の軍事会議でソリマーンがアラブディーノ王への忠誠を誓う場面、キリスト教軍の司令官ゴッフレード・ディ・ブリーオーネが魔女アルミータに騙されて戦列を離れていた兵士たちにその間の出来事を問う場面が含まれる。第十一歌ではいよいよエルサレムの町への攻撃が始まる。勝利を祈願して聖山に登るキリスト教軍、城壁をはさんだ攻防戦、ゴッフレードの負傷と傷の治療などが描かれる。
- (二) 第九歌九十一節以下参照。
- (三) 第四歌七十六―九十六、および第五歌七十以下参照。
- (四) 『創世記』十九章二十四で語られる死海近くの古代都市ソドムとゴモラがあった土地。
- (五) この場面におけるアルミータの台詞には、オデュッセウスの部下たちを豚に変身させる魔女キルケーとの類似が認められる（ホメーロス、『オデュッセイア』第十巻参照）。
- (六) 第七歌三十三参照。
- (七) 第七歌二十七―四十八参照。
- (八) 魔術師イドラオーテを指す。第四歌二十参照。
- (九) リナルドがキリスト教軍の戦列から離れた経緯は第五歌二六―三十一参照、リナルドが死んだという噂については第八歌四十七以下参照。
- (十) 「邪悪な皇帝」とは十二世紀の皇帝フェデリコ・バルバロッサを指す。当時のエステ家にはリナルドと称する騎士がいて、皇帝フェデリコ・バルバロッサと実際に戦った。この歴史上のリナルドと騎士道文学に役者として定着している空想上の騎士リナルドがここでは重ね合わされている。なお、銀色の翼を持つ鷹はエステ家の紋章になっている。
- (十一) この作品が書かれていた一五七五年は聖年で、ローマに巡礼した信者に贖宥が与えられた。「立派な人物」とは当時教皇の位に会ったグレゴリオ十三世のこと。
- (十二) この叙事詩が下敷きになっている第一次十字軍の提唱者。
- (十三) 第一次十字軍はエルサレムを攻め落とす一年前にアンティオキアを策略によって攻略した（一〇九八年）。その際の攻撃は夜間に行われ、町の中にいたキリスト教徒の導きがあったとされる。
- (十四) この箇所では語られる薬草の効用などは古代ローマの叙事詩『アエネイス』（ウェルギリウス著）第十二巻で語られている。ハクセンはイータ山があるクレタ島など南欧を原産とし、昔は薬草として重宝された。
- (十五) 小アジアの地方で、その地の泉の水には治癒効果があるという。